

## 18世紀ロシア軍事ハウスホールドとしてのバルト＝ドイツ人の機能

\* 田 中 良 英

## 要 旨

ロシア国家の領域はとりわけ17世紀後半以降、大きく変化してきており、その「軍事ハウスホールド」の出自も一様ではない。本稿ではそうしたロシアの軍事ハウスホールドの多様性を確認するため、1721年にロシア帝国に併合された沿バルト地域のエリート、通称バルト＝ドイツ人を分析対象とし、彼らと18世紀ロシア国家との関係性について、全体像の整理と個々人の具体的活動の調査とを通じ、解明を試みた。伝統的に自立性が強い現地の政治的・社会的状況は形式的にはロシア領となった後も変わることはなく、ロシア勤務が強制ではなかったこともあって、とりわけかつての支配者スウェーデン王国とのつながりを維持する家系・個人が依然多かった。そのため、少なくとも18世紀においては、ロシア勤務を選んだバルト＝ドイツ人たちについても、民族集団的な性格は乏しかったように見える。ただし個々のバルト＝ドイツ人エリートの中には、近衛連隊への所属を一因として急速に地位を高め、スウェーデンや他国とのつながりを活かしながら、ロシア帝国の発展にとって大きな貢献をなす者も存在した。また、時間的経過とともにロシアの国際的なプレゼンスが高まるにつれ、一族内の先行者を媒介として、ロシア官界に入るバルト＝ドイツ人も増加傾向を示している。

**Key words** : 18世紀, ロシア, 軍事ハウスホールド, 貴族, バルト＝ドイツ人

## 1. はじめに

2022年2月末に始まったロシア連邦によるウクライナ侵攻、いわゆる「ウクライナ戦争」は、現代世界における軍事力の行使の正当性を議論の俎上に乗せるとともに、ソ連期の国家的枠組の性格、1991年のソ連解体後のロシア連邦と旧ソ連邦構成共和国との関係性、その淵源となるロシア帝国時代の中央－地方関係を始め、様々な問題への関心を高めていると思われる。加えて、ウラジーミル・プーチン露大統領が自国の「特別軍事作戦」を正当化するにあたり、歴史的過去に関する自身の認識を大きな論拠としていることもあり、歴史認識の評価そのもの（例えば、個々の歴史認識が相反する見解を示す場合、歴史的過去は直接には真偽を確認できないがゆえに、いずれも尊重すべきと考えるのか。それとも一定の区別は可能として、その際の判断はいかにして下すべきなのか、など）もまた、改

めて検討に付されている。

こうした現在の状況に対し、本稿の論点に関わるものとして、まず二点を確認しておきたい。第一に、人類史上、かつては国家間戦争や内戦、反乱など、軍事力の行使自体はむしろ普遍的に目撃されたという点である<sup>1</sup>。とりわけ16～18世紀ユーラシア西部については、これまでも田中(2022)などで紹介してきたように、ドイツ人研究者ブルクハルト Burkhardt, Johannes が「戦争の凝集(Kriegsverdichtung)」や「平和のなさ(Friedlosigkeit)」を時代的特徴と表現するなど、戦争は日常的な現象であった。こうした時代状況は軍事に関わる人材の存在意義を高めることになり、「国家的要請に基づき、士官層として軍を支える機能を果たしたことを契機に、一定の社会的地位を獲得しつつ、官界<sup>2</sup>での影響力を保持するにいたった個人・家系」、すなわち「軍事ハウスホールド(military household)」(田中(2002, P. 122)の定義による)の

\* 宮城教育大学 教科内容学域 人文・社会科学部門(歴史学：西洋史)

台頭の背景となった。ただし、それはとりもなおさず、たとえ戦争が頻発しているからと言って、交戦国の広範な住民層がそれに直接に関与していたわけではなく、依然少数のエリートが活躍する分野に留まっていた構図の裏返しだったともみなし得る。移動や通信のインフラの未発達もあり、自国の戦争とはいえ、それを知ることなく日常生活を送っていた住民が多数だったと推測され、このように戦争そのものの社会におけるインパクトが現代とは異なっていた点にも留意する必要があるだろう。

第二に、ロシア国家の領域は時期ごとに変動しており、現在のロシア連邦の国土に含まれている諸地域、またかつてロシア帝国やソ連の領域に併合された経験のある諸地域を、ロシア国家史の恒常的な要素として捉え得るかという問題が考えられる。プーチン政権の近年の言説においては、現在の領土にとどまらず、後者に関しても、若干の強弱はあれ基本的には自身の勢力圏とみなすにとどまらず、ウクライナを代表例として、時に自国史(ナショナル＝ヒストリー)の一部と主張している事例が見られる。しかしながら、ユーラシア西部の近世国家については1990年代以降、「複合王政(composite monarchy)」や「礫岩のような国家(conglomerate state)」の名称を用いつつ、国家を構成する諸地方の独自性——歴史的起源の相違、民族・法制・文化などの面での多様性——を強調し、国家的枠組の内部でも均質性・一体性を否定する傾向が強い(日本での代表的な成果の一例として、古谷・近藤(2016))。その意味では、近現代の国境線を基準に、その内部の諸地域が同一の歴史的経験や文化を共有してきたと見ることは、それ以前の実態と大きく乖離する可能性があると言えよう<sup>3</sup>。とりわけ17世紀後半以降、大きく国境線を変えてきたロシア国家については、

それを構成する地域自体が様々に変化した点からも、このような乖離はより顕著であると推測される。この点については、考察のための情報を本論の方で具体的に提供することにしたい。

こうしたロシア国家の境界線の変更は、周囲の勢力とのパワー＝バランスもあり、西方については17世紀後半以降にようやく一定の動きを見せ始めた。18世紀においてもヨーロッパを東西につなぐ重要な連絡路としてのバルト海の意義は依然大きく、その覇権を巡り以前から続いた諸国家間の競合関係と戦争とに対しては、後述するように16世紀後半以降、ロシアも関与するようになるが、実際に勢力圏を確保するには18世紀初頭、ピョートル1世の治世(1682～1725年)を待たねばならなかった。スウェーデンとモスクワ大公国・ザクセン＝ポーランド・デンマークとの間で争われた北方戦争(1700～21年)の結果、ロシアは1721年のニシュタット講和条約により、ヴィーボルクを中心とするカレリア地方や後のサンクト＝ペテルブルクを含むイングリア(ロシア語ではインゲルマンランヂヤ)のほか、現在のエストニア、リトアニア、ラトヴィア東部にほぼ重なるエストラント(ロシア語ではエストリヤンヂヤ)とリヴァント(リヴォニア、ロシア語ではリフリヤンヂヤ)の領有を認められた。本稿では、これらエストラントとリヴァントにその西方のクールラント公国(ロシア語ではクルリヤンヂヤ)を加えた地域を「沿バルト地域」と呼ぶことにするが、この併合を通じて、現地の支配層であるドイツ系住民、通称バルト＝ドイツ人が、形式上はロシア帝国の臣下・臣民に包含されることになる。ただし後述するように、現地の自治や住民の特権が認められたことと相まって、伝統的なロシア人貴族が国家への勤務を義務付けられる「勤務貴族」としての性格を帯びていたのに対

1 なお、あえて付言しておく、こう記しているのは、現在のウクライナ戦争に関しても、「人類史の普遍的な一部分」として肯定しようとする目的ではない。むしろ本文でも直後で示唆しているように、歴史的過去に関する評価に際しては、その時代的特徴や当時の規範・価値観を考慮する必要があるとの見解の例を示しているにすぎない。そして総力戦体制による戦争そのものの影響範囲の飛躍的拡大、兵器の殺傷力の増加による暴力性の高まりへの反省などから、第二次世界大戦後、国際社会は安全保障の重要な手段として国際連合を設立するとともに、国連憲章第2条第4項により「すべての加盟国は、その国際関係において、武力による威嚇又は武力の行使を、いかなる国の領土保全又は政治的独立に対するものも、また、国際連合の目的と両立しない他のいかなる方法によるものも慎まなければならない」と定め、国家による軍事力の行使を極限したのだとすれば、現在はそうした国際秩序上の規範や価値観との整合性を基準として、今回の開戦の是非を評価せねばならないと考える。

2 なお本稿では、軍と行政機構双方を包括する、ロシア国家への公的な勤務の舞台全体を指す語として「官界」を用いる。

3 この点は、日本史についても同様である。特に小学校の歴史教育においては、現在の日本の国境線を所与のものとするだけで、その内部において共通の歴史的表象が生じてきたかのような印象を与えかねない傾向が潜在するように思われる。

し、このバルト＝ドイツ人とロシア官界との関係は同様ではなかった。本稿では、武官としての活躍を通じて18世紀ロシア官界に参与したバルト＝ドイツ人「軍事ハウスホールド」の存在を改めて確認し、その実例を参照することで、ロシア帝国の発展に寄与したエリートの多様性を考えることにしたい。

ちなみに、リーベン (2002, P. 121) によると、エカチェリーナ2世期 (1762～96年) にあたる1762年の時点で、ロシア軍の高級将校<sup>4</sup>402名のうち40%がロシア人以外で、そのうちの4分の3がバルト＝ドイツ人との記述があり、さらに山本 (2016, P. xi) では、「特権的地域」としての沿バルト地域、「特権階層」としてのバルト＝ドイツ人を巡る諸問題の総体、いわゆる「オストゼイ問題 (バルト＝ドイツ人問題)」が1860年代以降に急速に政治化した点が強調されている。こうしたロシア社会におけるオストゼイ問題への注目は、バルト＝ドイツ人のプレゼンス (存在感) の高まりの裏返しと推測され、それゆえにこの時期の沿バルト地域やバルト＝ドイツ人を分析対象とした研究が蓄積されてきたが、それとは対照的に、18世紀のバルト＝ドイツ人貴族によるロシア官界への影響を検証した研究は、管見の限り内外において極めて乏しい<sup>5</sup>。特に彼らの全体像には不明なところが多かった。そこで本稿では、まずは①18世紀にロシア軍で勤務に就いたバルト＝ドイツ人の家系・個人の情報の包括的整理を試み、さらに②その具体的活動の一端を紹介したいと考える。とはいえ、基本的に①については二次文献に依拠する段階に留まり、必ずしも網羅的になっていないくらいは否定できない。また②の点でも、主として同時代人の日記・回想などの史料の中にはそれほど詳細な情報が含まれておらず、そのこと自体が当時のロシア官界におけるバルト＝ドイツ人のプレゼンスの相対的な低さを示唆しているとも考えられる。それゆえ本稿は、今後さらに調査を進めるべき家系や個人を提示したという点で、試論としての性格に留まっていることをお断りしておく。

## 2. 沿バルト地域の沿革

### ①バルト＝ドイツ人の起源

バルト＝ドイツ人の特徴を理解するためには、彼らの出身地である沿バルト地域の性格を考慮する必要がある。カセキャンプ (2014) や山本 (2016) に依拠しつつ、簡単に確認することとする。

同地域においては、紀元前11000年ぐらいから定住が始まったと考えられており、さらに新石器時代にフィン＝ウゴル語派やバルト語派の人々が流入することで、自由農民を主体に、バルト諸族と呼ばれる先住民族の社会が形成されるようになった。彼らは伝統的な多神教を信仰し続けていたが、12世紀中葉以降、現地にキリスト教を信奉するドイツ人商人が西方から到来し、リューベクを皮切りに都市建設と商業活動とに従事する。並行してローマ教皇の支持を背景に、キリスト教宣教活動が進められ、それは時に「北の十字軍」とも呼ばれる軍事的手段を伴う様相を示した。

こうした活動は、リヴラント主教に任命されたアルベルト (1165～1229) の主導下、1201年に拠点としてのリガ市の建設、さらに1202年、西方から招かれたドイツ人を中核とする帯剣騎士団 (リヴォニア騎士団) の設立の形でさらに進展する。この帯剣騎士団はデンマーク王国と競合しながら勢力を拡大したものの、1236年に現地のジェマイティア人、ゼムガリア人との戦闘で壊滅的な打撃を受けた。ただしその残党が、プロイセンを拠点に活動していたドイツ騎士団に吸収される形で (これ以降についてはリヴォニア騎士団と呼ばれることが多い)、その後もいわゆる「東方植民」の一端として、ドイツ人騎士の勢力拡大が続いた。こうして外来のドイツ人が領主貴族として現地農民を支配する一方、都市部においても西方からの手工業者や商人の移住により、市会と同職組合とを基盤とする支配構造が確立されるなど、各種のドイツ人がエリート層を構成するにいたり、このエリートらがバルト＝ドイツ人の基層を成すことになる。

4 通例は佐官以上を指すが、ここでリーベンが対象としている具体的範囲は不明である。

5 最近刊行された鈴木健夫の大著 (鈴木 (2021)) でも、エカチェリーナ2世の呼びかけに応じ、ヴォルガ沿岸域に農民として入植したドイツ人 (通称「ヴォルガ＝ドイツ人」) が主要な対象となっており、18世紀のバルト＝ドイツ人貴族の動向についてはほとんど言及されていない。

## ②沿バルト支配を巡る諸国家の対立

上述のような社会構造に基づく沿バルト地域の自立的性格は、先取りして記すと、オストゼイ問題が先鋭化する19世紀以降までも基本的に継続する。ただしバルト海の覇権を巡り、東方のモスクワ大公国が15世紀後半以降、現地への進出を図ったことで、周囲の諸国家の影響が強まり始める。モスクワ大公イヴァン3世(在位1462～1505年)は、1492年に自身の名を付した拠点都市イヴァンゴロト(現在のエストニアとロシアとの国境地帯にあり、ナルヴァ川を隔ててナルヴァ市の対岸に位置)を建設するとともに、1493年にデンマークと同盟条約を締結した後、1495～97年にはスウェーデンと戦火を交えた(中村, 2003, P. 72)。

さらに1501～03年にはモスクワとリヴォニア騎士団との直接対決もあったものの、半世紀間の平和を経た後に現地の情勢を大きく変化させたのが、イヴァン4世(雷帝)期(1533～84年)の1558年に始まったリヴォニア戦争(第一次北方戦争)である。侵攻を試みたモスクワ大公国は当初リヴォニア騎士団との戦闘を有利に進めたが、ポーランド＝リトアニアやスウェーデンの参加により戦争は長期化し、最終的にモスクワは開戦時の占領地のみならず周辺地域も含めて領土を失うことになった。また、この過程でリヴォニア騎士団は世俗化され、ポーランド＝リトアニアの宗主権下に入った。特に公国化した西部のクールラントは、18世紀にいたるまでポーランドの影響下にあり続ける。

このようにまずはポーランド＝リトアニアの勢力が現地で強まったものの、次いで1600～29年の対ポーランド戦争に勝利したスウェーデンが、リヴォニア戦争期に自身が勢力を伸ばしていたエストラントに加え、リヴァントにも拡張することで、1721年まで続く「バルト海帝国」としての性格を顕在化させる<sup>6</sup>。ただし、これらの宗主国が従来通りバルト＝ドイツ人エリートに現地の運営を委ね、彼らの特権的地位を認めていた点には留意する必要がある。

## ③北方戦争によるロシア帝国への併合

16～17世紀にわたって展開してきたバルト海の覇権争奪の最終局面が、モスクワ大公国・ザクセン＝ポーランド・デンマークの「北方同盟」とスウェーデンとの間に1700年に開始された北方戦争(北欧史の文脈では、大北方戦争と呼ばれる)である。1700年のナルヴァの会戦で大打撃を受け、当初劣勢であったピョートル1世治下のモスクワ大公国は、デンマークやポーランドとの戦闘のためにスウェーデン軍が転進した隙を突き、1704年にはナルヴァを含む東エストラントを占領する。さらに1708年のレスナーヤ(現ベラルーシ)の会戦、そして1709年のポルタヴァ(現ウクライナ)の会戦でスウェーデン陸軍に大勝利を収め、翌1710年には沿バルト地域へのさらなる進出を開始した。6月6日にヴィーボルク、7月4日にリガ、9月7日にケクスゴリム、9月29日にレーヴェリ(現エストニアのタリン)を占領している<sup>7</sup>。

この過程において、同年8月16日付けで「エストリヤンヂヤ公国及びレーヴェリ市への布告(универсал)」、9月30日付けで「リフリヤンヂヤ公国貴族への特権認可状(жалованная грамота)」及び「リガ市民への特権認可状」、さらに1712年3月1日付けで「エストリヤンヂヤ公国貴族・地方機関への特権認可状」、3月13日付けで「レーヴェリ市への特権認可状」が公告された。一例として、このうち1712年3月1日付けの特権認可状の内容を紹介すると、ピョートル1世は、「エストリヤンヂヤ公国の貴族身分全てと地方機関は…[中略]…彼らが自分たちの上位者から、すなわち代々の国王…[中略]…から受領し、今日まで自由に行使してきた、彼ら古来の特権、権利、裁判、法制、判例、諸条項、地域の賞賛すべき慣例の承認および確立について…[中略]…朕に請願したため、朕は皇帝としての恩寵と慈悲に従い、彼らに対して、それらに関し拒絶することを望まない」と説明し(Законодательство, 1997, С. 507)<sup>8</sup>、現地のバルト＝ドイツ人貴族に対して既存の特権・権利や諸制度の維持を約束した。

6 さらにスウェーデンは1642～45年にデンマークと戦ったトシュテンソン戦争での勝利により、オーゼル島(現サーレマー島)も獲得した。

7 これらの日付はロシア暦(ユリウス暦)による。以下も同様である。18世紀については、11日を加えるとグレゴリウス暦に換算される。

8 以下、訳書の情報が付されていない場合、本稿におけるロシア語史料原文からの日本語訳は著者による。

この点は都市住民についても同様であり、同年3月13日付けの特権認可状では、「何となればエストリヤンチヤの首都レーヴェリは、我々に引き渡され、我々の支配下に入った。それゆえ、彼らの特権、旧来から承認された権利、自由、司法制度と慣例について、彼らが古来、今日まで代々の政府から獲得し保持していたように、承認し維持されるだろう」との文言が示されている（Законодательство, 1997, С. 508）。

こうした既存の統治構造の維持の一方で、1708年にモスクワ大公国の地方行政区分において新たに導入された県（губерния）制度については、1713年7月28日付けの勅令により既存のスモレンスク県と合わせてリガ県の新設（ПСЗ-I, 1830a, С. 49）、さらに1719年5月29日付けの勅令ではレーヴェリ県の新設について命じられている（ПСЗ-I, 1830a, С. 701-710）。このようなりガやレーヴェリでの実効支配の強化については、例えば1716年1月16日付けの勅令において、現地守備隊のための物品倉庫の存在が示唆された点（ПСЗ-I, 1830a, С. 189）、1717年2月27日付けの勅令で、同様に海港として機能していたペテルブルクやアルハンゲリスクと同じく、不作による穀物不足を理由に、両市から国外に物資を輸出することが禁じられた点（ПСЗ-I, 1830a, С. 489）などにうかがえる。

ただし、このように地方行政制度の規格化が一方では試みられたからとはいえ、沿バルト地域の「ロシア化」が進んだとは認めがたい。最終的に北方戦争を終結させた1721年のニシュタット講和条約においても、ロシア領と正式に認められた「リフリヤンチヤ及びエストリヤンチヤ地方、さらにエゼリ島 [=オーゼル島]の全住民は貴族も非貴族も、そしてそれらの地方に存在する諸都市、市会、ギルドとツンフトは、スウェーデン統治下で彼らが所有していた特権、慣習、権利、公正を持つ形で、恒常的かつ確固として扶養され保護される」ことが、第9条で改めて約束された。また第10条では、現地の信仰に関し「良心に対するいかなる強制も導入されないであろう。なお、主として福音派の信仰、教会、学校、そしてそれに属するものは何でも、最近のスウェーデン政府の時期に残され維持されていたのと同じ基盤にあるが、前記の土地において今後はギリシア教の信仰も全く妨げられることなく自由を実現される可能性があるし、そうなるであろう」と宣告されており、正教徒の保護の態度が示唆されるな

ど、併合に伴う一定の変化もうかがえるものの、現地住民の既存の信仰がやはり尊重されている点は注目すべきである（ПСЗ-I, 1830b, С. 420-431）。

なお、このニシュタット条約締結の祝賀を機に、ピョートル1世は全ロシア皇帝（император）の称号を名乗ることになるため、これ以降についてはモスクワ大公国ではなくロシア帝国と表記することにする。

#### ④ピョートル1世期以降のクールラントとの関係強化

ピョートル1世を含め、17世紀ロマンフ朝のツァーリや皇子たちはモスクワ大公国内の貴族女性と婚姻する慣例が見られた一方、17世紀ロシアに関する第一級の史料とされるコトシーヒン Котошихин, Григорий Карпович（1667年没）の手記によると、皇女たちは「まるで隠遁修道女のように暮らしていて、めったに人を見ることも人に見られることもなく、何時でも祈りと精進のうちに過ごし、顔を涙で濡らしている。皇族に生まれたものの楽しみはあるものの、彼女らには結婚して子をなすという全能の神が人間に与えられた喜びがないからである」（松木, 2003, P. 50）とされるように、生涯を独身で過ごした。こうしたロマンフ朝の婚姻政策が大きく変わるのがピョートルの治世である。ピョートル自身も北方戦争でロシア軍の捕虜となったマルタ・スカヴロンスカヤ Скавронская, Марта（1684～1727、後のエカチェリーナ1世（在位1725～27年））と1712年に再婚するのみならず、自分の皇太子アレクセイ（1690～1718）を神聖ローマ帝国の領邦の一つ、ブラウンシュヴァイク＝ヴォルフェンビュッテル公国の公女と1711年に結婚させた。また一時期、自身の共同統治者であった異母兄イヴァン5世（在位1682～96年）の娘たちも国外に嫁がせる。その一人が、クールラント公爵フリードリヒ＝ヴィルヘルム（1692～1710）と1710年10月31日に結婚したアンナ（1693～1740）である。両者の結婚式はサンクト＝ペテルブルクで行われたが、帰国の途上でフリードリヒ＝ヴィルヘルムが急死したため、アンナは異国クールラントで独身生活を送ることとなった。

ピョートル1世の死後、その妻エカチェリーナ1世を経て、孫のピョートル2世（在位1727～30年）が帝位に就くが、彼が1730年1月19日に急死すると、新たな帝位継承者としてクールラントからアンナが招聘された。この動きを契機に、アンナの最大の寵臣とさ

れるビューレン Bühren, Ernst Johann (ロシア名ピローン Бирон, Эрнст-Иоганн, 1690～1772)を始め、現地のバルト＝ドイツ人の一部がロシア官界に入る。軍事ハウスホルドとは呼びがたいため、本稿では特に対象とはしていないものの、ロシア帝国の外交官として活躍したケーゼリンク Кейзерлинг, Герман Карл (1697～1765) や コールフ Корф, Иоганн-Альбрехт (Korff, Johann Albrecht, 1697～1766) については田中 (2017) で紹介したことがある。

クールラントの宗主国であったポーランドの議会に対する、このケーゼリンクの働きかけもあり、ビューレンは1737年にクールラント公爵に選出された。ちなみに1740年にアンナが亡くなると、ビューレンは、アンナの姪の子で次帝となったイヴァン6世 (在位1740～41年) の摂政の座に就いたが、同年11月の宮廷クーデタにより逮捕され、シベリアへの流刑となる。この後、1758年まで空席となっていたクールラント公位には、ポーランド国王アウグスト3世 (在位1734～63年) の王子カール (1733～96) が一時的に就くものの、ロシアにおいてピョートル3世 (在位1761～62年) の即位を機にビューレンが大赦されると、彼が1763年にロシアの後援により復帰することになった。さらに1769年には彼の息子ペーター (1724～1800) が新たにクールラント公爵に選出されたが、1795年の第3次ポーランド分割により同公国はロシア帝国に併合される。こうして沿バルト地域全体がロシアの直接的な支配下に置かれたのである。

### 3. 18世紀バルト＝ドイツ人軍事ハウスホルドの概要

このようなロシア帝国による沿バルト地域への伸長の一方で、現地のバルト＝ドイツ人エリートたちの特権的立場や自立性に関しては、エカチェリーナ2世期にロシア帝国への統合深化に向けた検討がなされたものの、パーヴェル1世期 (1796～1801年) に覆され、結局のところ18世紀を通じて変わることはなかった (山本, 2016, PP. 15-20)。

上記のような現地の政治的・社会的状況を背景として、18世紀にロシア軍で勤務したバルト＝ドイツ人には具体的にどのような家系・個人が含まれていたのか。主に *Блонский* (2007)、*Иванова* (2020)、

*Федорченко* (2003)、*Португальский, Рунов* (2009) などロシアの貴族家系や軍事エリートに関する人名事典を基に抽出を試みたのが、以下の表となる。こうした情報源の特性ゆえに、将官など高位に上り詰めた士官層への偏りがある点は否定できない。その意味で、本来バルト＝ドイツ人エリートの各家系の系譜学的分析などにも踏み込み、さらに全体像を捕捉する必要があることも自覚しているが、それは今後の課題とせざるを得ない。また表で取り上げた個人についても、情報を十分に調査しきれているとは言えず、その追補も必要である。

その一方で、本稿が軍事に端を発しつつ、官界全体に影響力を持つにいたった家系・個人の実態解明を主要な目的としているからには、そのように広範な活躍を担う可能性が高かった上位層に着目することには一定の妥当性があり、また18世紀時点でのバルト＝ドイツ人諸家系とロシア官界との関係性の強弱を判断するための一助として機能し得る側面もあるように思われる。なお18世紀の範囲内での分析を試みる本稿では、バルト＝ドイツ人のうち、沿バルト地域がロシア帝国領となる以前から18世紀初頭のモスクワ大公国に勤務していた家系・個人も含める一方で、終期については1780年までに生まれていた者 (すなわち18世紀の内に勤務を開始した可能性が高い者) に対象を限定している。

情報の不足もあるため厳密な数量化は困難ながら、全体的な特徴として、生年の判明している者88名のうち、1730年までに生まれていた者、すなわち18世紀の前半に勤務を開始していた可能性が高い者の数は26名 (29.5%) と相対的に少ない。さらにこの中に親子や兄弟が含まれている事例も、No.2とNo.3のバルク父子、No.28とNo.29のカウリバルス兄弟と希少である。やはり沿バルト地域がロシア帝国領となったり関係を深めたりしてからのほうが、人材の流入が一定程度加速されたことは確かと言えよう。

ただしロシア人貴族がピョートル3世期の1762年2月28日、いわゆる「貴族の自由に関するマニフェスト」において、「ロシアの高貴な貴族層全員に対し、朕の帝国のみならず、その他、朕に友好的なヨーロッパ諸国において、勤務を継続する自由を与えて賞している」とされ、ロシア以外での勤務をようやく許可されたとは異なり (ПСЗ-I, 1830с, С. 912-915)、バルト

表 18世紀ロシア帝国におけるバルト＝ドイツ人軍事ハウスホールドの例

No.	名	生没年	教育/前歴	近衛連隊での勤務開始	最終的な階級	沿バルト地域との関係性	受勲(受爵)	親族関係
Багговуты (Baggehuftvudt)								
1	Карл Густав (Карл Федорович)	1761-1812	17世紀にエストリヤンチヤに移住	近衛連隊での勤務開始	陸軍中将			
Балки (Balken)								
2	Федор Николаевич	1670-1739	ドイツよりリフリヤンチヤに移住		陸軍中将			
3	Павел Федорович	1690-1743			陸軍中将			No. 2の子
4	Петр Федорович	1712-62			陸軍中将			
Барклай-де-Толли (Barclay of Tolly)								
5	Рейнгольд Готгард (Богдан)	1726-81		スコットランド出身。17世紀にリフリヤンチヤに移住	陸軍中尉			
6	Эрих Иоганн				陸軍少将			No. 5の子
7	Михаил Андреас (Михаил Богданович)	1761-1818			陸軍元帥			No. 5の子
Бенкендорфы (Benskendorff)								
Бранденбургルクに起源。16世紀にリフリヤンチヤに移住。リガ市上級市長 (старший бургомистр) の家系として、スウェーデン支配下ですでに貴族身分								
8	Иоанн Михаил (Иван Иванович)	1720-75						
9	Христофор Иванович	1749-1823	家庭教育	セミョーノフスキ近衛連隊	歩兵大将	リガ県総督/エストリヤンチヤ・リフリヤンチヤ県総督	○	No. 8の子
10	Георг Христиан	1754生			大隊長			No. 8の子
11	Ганс (Иван Иванович)	1765-1841			近衛中尉・陸軍准将			No. 8の子
Берги (Berg)								
15世紀よりバルト沿岸に記録								
12	Магнус Иоганн (Максим Васильевич)	1784没			陸軍大将		○	
13	Григорий Максимович	1765-1838			歩兵大将	レーヴェリ県総督		
Будберги (Будберги-Бенинггаузены) (Budberg-Boeningghausen)								
ヴェストファレーレンに起源。13世紀にリフリヤンチヤに移住。1693年にスウェーデン王国男爵位								
14	Яков Федорович				陸軍大佐			
15	Андреас Готтхард Эбергард (Андрей Яковлевич)	1750-1812			歩兵大将 (ただしむしろ外交官として活躍)		○	No. 14の子
16	Готтхард Вильгельм (Богдан Васильевич)	1766-1832	ストラスブール大学		陸軍大尉 (後に外交官)			
17	Карл Васильевич	1774-1829			陸軍中将			男爵家とは別系統
Буктевдены (Bukhoeveden)								
下ザクセンに起源。12世紀末にリヴォニアに移住								
18	Густав Фридрих							
19	Иоанн Людвиг							No. 18の弟
20	Генрих Отто	1741-75						No. 18の弟
21	Фридрих Вильгельм (Федор Федорович)	1750-1811	砲兵・工兵貴族士官学校				○ (ロシア帝国伯爵位 (1797))	No. 18の弟
Гасфорды (Hasford)								
Бранденбургルクに起源。17世紀末にエストリヤンチヤに移住								

22	Иоганн Август Фридрих (Иван Иванович)	1713-81					陸軍大佐		
23	Христиан Иоганн Бурхард (Христиан Иванович)	1756-1819					陸軍少将		No. 22の子
Дерфельдены (Derfelden)									
24	Отто-Вильгельм Христофорович	1735-1819	16世紀に恰バルト地域に移住	家庭教育	近衛連隊		騎兵大将	○	
Игельстромы (Igelström)									
25	Отто Генрих (Иосиф Андреевич)	1737-1817 (1823?)	17世紀半ばよりスウェーデン貴族としてリフリヤンゲン・エストラトリアンゲンに所領		セミヨーンノフスキ一近衛連隊		歩兵大将	○ (神聖ローマ帝国伯爵位 (1782))	
26	Александр Евстафьевич	1770-1855					陸軍大将		No. 25の甥
27	Густав Отто Андрей (Густав Густавович)	1777-1834 以降					陸軍少将		
Каульбарсы (Kaulbars)									
28	Герман Иванович	1727-99	ヴェストフアレーンに起源。17世紀に移住				陸軍少佐		
29	Карл Иванович	1729-87					高級副官・陸軍中 将		No. 28の弟
30	Роман Васильевич	1767-1846					陸軍中佐		No. 28の養子
Кюринги (Kyörting)									
31	Фридрих Иоганн (Федор Иванович)	1704-71	シュヴァーベンに起源。16世紀にクールラントに移住				陸軍大佐		
32	Карл Генрих (Карл Федорович)	1746-1820					陸軍中將		No. 31の子
33	Богдан Федорович	1746-1826		陸軍貴族士官学校			歩兵大将	○	No. 31の子
34	Отто	1754-1812					陸軍少将		No. 31の子
35	Карл	1775-1817					陸軍少将		No. 33の子
Корфы (Korff)									
36	Григорий Иванович	1758 没	ヴェストフアレーンに起源。15世紀に恰バルトに移住。1692年に神聖ローマ帝国男爵位				陸軍少将		
37	Николай Андреевич	1710-66					陸軍大将		
38	Федор Карлович	1774-1826					高級副官・陸軍中 将	○	
Крейцы (Kreutz)									
39	Циприан (Киприан) Антонович	1778 (1777?)-1850	バイエルン (ザクセン?) に起源。17世紀半ばにエストラトリアンゲンに移住	士官学校	イズマーイロフスキー近衛連隊		騎兵大将	○	
Крузенштерны (Kruzenstern)									
40	Иоганн Антон (Иван Федорович)	1770-1846		海軍貴族士官学校			海軍大将		
Ламздорфы (Lambsdorff)									
41	Иоганн Рейнгольд (Иван Юрьевич)	1715-89	ヴェストフアレーンに起源。15世紀にリヴォニアに移住				陸軍大佐		
42	Густав Матвас (Матвей Иванович)	1745-1828					歩兵大将	○ (ロシア帝国伯爵位 (1814))	
Ливены (Liven)									
43	Георг Рейнгольд	1696-1763	1653年にスウェーデン王国男爵位				陸軍大将		
44	Матвас (Матвей) Эбергарт	1698-1762					陸軍中將		
45	Иоганн Вильгельм	1708-58					陸軍中將		
46	Юрий Григорьевич	1713-71					陸軍大将		
47	Отто Генрих Андреас (Андрей Романович)	1726-81					陸軍少将		
48	Карл Христофор (Карл Андреевич)	1764 (1767?)-1844	Италия・ドイツ	プレオプラジェー			歩兵大将 (後に国	○	No. 47の子



49	Христофор Андреевич	1774-1838	に留学後、貴族幼年学校	近衛連隊	民教育相	歩兵大将(外交官としても活躍)	○(最高公爵(1826))	No. 47の子
Мейендорфы (Meiendorff)								
50	Рейнгольд Иоганн	1796 没	リフリヤンヂヤ出身。17世紀後半にスウェーデン王国男爵位		陸軍大将	リフリヤンヂヤ県副知事		
51	Казимир Иванович	1749-1813			陸軍大将	リフリヤンヂヤ県知事		No. 50の弟
Мендены (Menden)								
52	Иван Алексеевич	1731(1730?) 没	ヴェストフアーレンに起源。15世紀に沿バルト地域に移住。1653年にスウェーデン王国男爵位		陸軍少将			
53	Иоганн Генрих	1700-68			陸軍中将			リフリヤンヂヤ県知事 Эрст Бурхард (1738-97)の父
Михельсоны (Michelsonen)								
54	Иван Иванович	1740-1807	英国に起源		騎兵大将		○	
Нироды (Nieroth)								
55	Бенедикт Понтус	1713-70年代	16世紀時点でエストリヤンヂヤに所領。18世紀初頭にスウェーデン王国男爵位・伯爵位		陸軍少佐			
56	Густав Рейнгольд Нумсены (Nimssen)	1769生			陸軍少佐			No. 55の子
57	Федор Михайлович	1734(1735?)-1806	陸軍貴族士官学校	セモノフスキ近衛連隊	騎兵大将		○	
58	Александр Фелорович	1774-1856			陸軍少将		○	No. 57の子
Опперманы (Oppermann)								
59	Карл Иванович	1765(1766?)-1831	シュレージエンに起源。父の代以前に伯爵位	イズマーイロフスキ近衛連隊	工兵大将		○	
Остен-Сакены (Osten-Sacken)								
60	Александр Магнус	1730-59			陸軍大尉			
61	Вильгельм Фердинанд	1754 没			陸軍大尉			
62	Фабиан Готлиб (Фабиан Вильгельмович)	1752-1837	デルブトの学校		陸軍元帥			○(ロシア帝国伯爵位(1821)、ロシア帝国公爵位(1832))
63	Иоганн Рейнгольд (Христиан) Христофор Иванович	1755-88	海軍士官学校		海軍中佐			
64	Еронимус Казимир (Ерофей Кузьмич) Палены (Palten)	1808 没			陸軍少将		○	
13世紀にリヴォニアに移住。17世紀後半にスウェーデン王国男爵位								
65	Петр Людвиг (Петр Алексеевич)	1745-1826	家庭教育	近衛騎兵連隊	騎兵大将	クルリヤンヂヤ県総督		○(ロシア帝国伯爵位(1799))
66	Павел Петрович	1775-1834		近衛騎兵連隊	騎兵大将		○	No. 65の子
67	Петер Йоханн Кристоф (Петр Петрович)	1778(1777?)-1864		近衛騎兵連隊	騎兵大将		○	No. 65の子

68	Карл Магнус (Магвей Иванович)	1776 (1779?) - 1863			近衛騎兵連隊	騎兵大将	リフリヤンヂヤ・エストリヤンヂヤ・クルリヤンヂヤ県総督	○	No. 65 の甥
Пакуль (Pakul)									
69	Иоанн Рейнгольд	1660-1707				陸軍中将			
Ребиндеры (Rebinder)									
70	Василий Михайлович	1730-1800以降				陸軍少将			
71	Рейнгольд Иоанн (Иван Михайлович)	1733-92				陸軍中将			No. 70 の弟?
Рейбницы (Reibnitz)									
72	Павел Адольфович	1749-1821				陸軍中将		○	
Рены (Ренны) (Röppe)									
73	Карл-Эвальд Магнусович	1667-1716				陸軍大将		○	
Реннекампы (Rennekampf)									
74	Иоганн Дитрих					陸軍中将			
Рихтеры (Richter)									
75	Христофор Адам	1751-1815					リフリヤンヂヤ県知事		
Розены (Rosen)									
76	Владимир Иванович	1742-92				陸軍中将			
77	Иван Карлович	1752-1817				陸軍中将			
78	Александр Владимирович	1778-1833				陸軍少将			No. 76 の子
Сиверы (Sievrs)									
79	Петр Иванович	1683-1733				海軍大将		○	
80	Иоахим Христианович	1720-79				陸軍中将			
81	Карл Ефимович	1774 没				陸軍中将		○	
82	Яков Ефимович	1731-1808				陸軍中将		○ (ロシア帝国伯爵位 (1798))	No. 81 の甥
83	Карл Карлович	1772-1856				陸軍中将			No. 83 の弟
84	Егор Карлович	1779-1827				陸軍中将			No. 83 の弟
85	Владимир Карлович	1780 (1790) - 1862				陸軍士官学校			
Стенбокы (Stenbock)									
86	Иоганн					陸軍大佐			
87	Понтус	1744 生				陸軍准将			No. 86 の子
88	Иоганн Магнус	1765 生				陸軍大佐			No. 86 の子
Тисенгаузены (Tiesenhäusen)									

89	Антон Иванович	1752-1830					歩兵大将		
90	Василий Карлович	1780-1857					陸軍大佐		
	Толл (Toll)	ライデン近郊に起源。14世紀に沿バルトに移住							
91	Георг Рейнгольд	1720-1811					陸軍少将		
92	Христофор Георг	1730-80					陸軍大佐		
93	Петер Людвиг	1752 生					陸軍少将		
94	Карл Федорович	1777-1844 (1842?)	陸軍士官学校				歩兵大将	○ (オーストリア帝国男爵位 (1814)、ロシア帝国伯爵位 (1829))	
	Ферзены (Fersen)	15世紀に沿バルト地域に移住。1674年にスウェーデン王国男爵位							
95	Ермолай Егорович	1742-1801	陸軍士官学校			プレオプラジエンスキー近衛連隊	歩兵大将		
96	Ганс Генрих (Иван Евстафьевич)	1747-1800 (1799?)					歩兵大将	○ (ロシア帝国伯爵位 (1783))	
	фон-дер-Ропп (von der Ropp)	クールラント出身							
97	Христофор	1728 没					陸軍中將		
	Фредериксы (Fredricks)	リフリヤンヂヤ貴族。銀行家 Иван Юрьевич (1723-79) がエカチエリーナ2世期にロシア帝国男爵位							
98	Андрей Иванович						陸軍准将	銀行家 Иван Юрьевичの子	
99	Петр Иванович						陸軍中佐	No. 98の弟	
100	Густав Иванович						陸軍中佐	No. 98の弟	
101	Александр Иванович						陸軍中佐	No. 98の弟	
102	Иван Иванович						陸軍中佐	No. 98の弟	
	Эйлеры (Euler)								
103	Христофор Леонтьевич	1743-1808					陸軍中將		
104	Александр Христофорович	1780-1854	工兵貴族士官学校			フィンランド近衛連隊	砲兵大将	○	No. 103の子
	Энгельгардты (Engelhardt)	スイスに起源。15世紀にリフリヤンヂヤに移住							
105	Вильгельм Генрих (Вильгельм Карлович)	1726-97					陸軍中將		
106	Николай Богданович	1737 生					陸軍少将		
107	Василий Васильевич	1749-1828					陸軍中將		
108	Христофор Фридрих	1762-1831					陸軍准将		

【註】「受勲(受爵)」の項目においては、ロシア帝国における受勲の事実が明らかな場合に「○」を記し、爵位を得た事実については( )書きの形で内容と年代を示した。

= ドイツ人貴族は、No.72のレイブニツやNo.80のシーヴェルスの前歴に象徴されるように、すでに他国での勤務が可能であった。むしろ表に現れる貴族以外に、他国に仕えた貴族が多数存在した可能性が高い。とりわけ、先述のように17世紀以降、現地にスウェーデンの支配権が伸長すると、スウェーデン国王に仕え、授爵などの形でその功績を讃えられていた家系が目立ち、表中においてもNo.14らブドベルク家、No.25らいゲリストローム家、No.43らリーヴェン家、No.50らメイエンドールフ家、No.52らメングゼン家、No.55らニロート家、No.65らパーレン家、No.86らスチェンボク家、No.95らフェルゼン家と多数が見出せる。

こうしたスウェーデンとのつながりは18世紀に入っても続き、北方戦争においてもスウェーデン側で従軍したバルト=ドイツ人が多かった。一例を挙げれば、1716年10月7日付けのピョートル1世による勅令では、「以前にスウェーデンで勤務し、朕の捕虜となった陸軍中佐 [シュリベンバフ Шлипенбах] について、彼の祖国であるレーヴェリへの帰還」が認められている(СИРИО, 1873, С. 334)。そしてロシア帝国への正式な併合以降も、スウェーデン国王に勤務し続けた家系、あるいは構成員が複数の国家に仕えた家系が存在する。特に後者に関しては、家系の存続や繁栄のために選択肢を広げる意義があったものと推測されよう。

このようなバルト=ドイツ人エリートの多様な動向は、表にも一部示したように、彼らの元々の出身地や移住の時期の相違に起因している可能性も考えられる。彼らの起源については、19世紀末の時点で歴史雑誌『ルースキー=アルヒーフ』において、大きくは9つの地域が示されている。最も目立つものとしてヴェストファーレン・フリーゼン・ホルシュタイン、その他に南ドイツ、中部ドイツ、北東ドイツ、スカンディナヴィア、英国、フランス、スペイン、そして現地の沿バルト地域である(Библиографическая, 1886)。このように一口にバルト=ドイツ人と表現されていても、エスニックな意味でのドイツ人に限定されない現地住民の多様性には、イベリア半島から沿バルト地域まで連なるヨーロッパ大陸沿岸部の諸地域間のネットワークの機能、それに依拠した「人の移動」の影響がうかがえる。

ただし、これら家系の起源の情報については、文

献により相違する場合が多い点もあわせて指摘しておく。その要因として、こうした情報が時に彼らの自称に基づく可能性(それゆえに虚偽を含みかねない可能性)、また複数の地域を移動しつつ沿バルト地域に到達したがゆえに、起源の特定が困難な可能性などが考えられる。ファーストネームについても複数の表記が見られる人物が多く、もともとドイツ風の名前を単にロシア語表記に直している場合、あるいはロシア風の名前に完全に置き換えている場合(例えばヨハン Johann をイヴァン Иван に置換)などが混在し、時に生没年のデータがそれぞれの文献で異なっている者もあるなど、同定が難しいこともあって、表中の情報に誤りがある可能性、相互の親族関係が十分に明示できていない可能性がある点もお断わりしておきたい。なお本稿では、これら軍事ハウスホールドに関し、可能な限り元々の姓を表中に併記しつつも、本文ではロシア語での記載に基づく形で姓名を示すことにする。

#### 4. 個々の軍事ハウスホールドによる活躍の事例

18世紀ロシア帝国で活動したバルト=ドイツ人エリートにおいては、諸史料から活動の情報の抽出を試みた限りでも、これまでに示唆してきたように一体性が低い印象が強い。それは、彼らのロシア勤務が、民族別・地域別の独立部隊の編成といった集団的な形態ではなく、ロシア人貴族と同様、軍の既存の部隊に士官として登用される形で実現したことによるものと思われる。ゲルマン・プレーヴェ(2008, PP. 22-25)によると、「一口にロシアのドイツ人と言っても、単一の民族集団であったことは一度もない」状況であり、いずれもエリート層を輩出したバルト=ドイツ人にせよ、「ペテルブルクとモスクワのドイツ人」にせよ、相互間のつながりを明示する事例は乏しい。とはいえ、こうした当時のエリート層の水平的な身分的結合の弱さについては、ロシア人貴族も同様であり、17世紀のような集団嘆願書の提出の事例が減少している点に示唆されるように、エリート各人が君主との個人的紐帯を個々に希求する傾向を示していた(一例として、田中(2004))。

それゆえ以下では、18世紀ロシアのそれぞれの時期において活躍したバルト=ドイツ人軍事ハウスホー

ルドの一部を個別に紹介することで、彼らとロシア官界との関係の変化を示すことにしたい。

#### ①イオガン＝レインゴリト・パトクリ (No.69)

先述のように、17世紀後半から北方戦争期においては、モスクワ大公国ではなくスウェーデン側に勤務していたバルト＝ドイツの方がむしろ多数派であった。その中で例外的にモスクワ軍に参加していたのがパトクリである。Энциклопедический (1898, C. 10) 及び *Иванова* (2020, C. 233) によると、彼は1660年にストックホルムにおいて、リヴラント行政官にしてスウェーデン陸軍少佐の父のところに生まれた。彼自身もまずはスウェーデンに勤務した後、1698年にザクセン＝ポーランドへの勤務に移る。1699年にはモスクワ大公国とデンマークとの対スウェーデン同盟条約の締結に関与し、1701年(1702年説も)以降にモスクワ勤務を開始した。1704年に陸軍中將としてポーランド派遣軍を委ねられるが、ワルシャワやポズナンらポーランドの主要都市がスウェーデン軍により占拠されると、ザクセンへと避難する。しかし現地でザクセン枢密会議と対立したパトクリは1705年に首都ドレスデンで拘束され、1706年にザクセンがスウェーデンと単独講和を結ぶと、スウェーデンに引き渡されることになった。ピョートル1世は1707年4月27日付けのデンマーク国王フレデリク4世(在位1699～1730年)宛ての書簡など、諸国に対しパトクリの救出に関する助力を要請したものの(Письма, 1907, C. 214-217)、結局それは果たされることはなく、彼はスウェーデンの裏切り者として、1707年10月に生きたまま車裂きの刑に処された後、四つ裂きにされている。

こうしたパトクリの遍歴は、本来同盟者であったはずのモスクワ大公国、ザクセン＝ポーランド、デンマークの北方戦争期における微妙な関係を物語るものだが<sup>9</sup>、スウェーデンによる苛酷な対応は彼の活躍ぶりへの憎悪の裏返しと捉えられるかもしれない。また彼は武官としてのみならず、外交官としてウィーン宮廷やザクセン宮廷にも派遣されており、こうした非ロシア人軍事ハウスホールドの活用例は、後述するように18世紀を通じて目撃される状況にあった。

#### ②ゲオルク＝レインゴリト・リーヴェン男爵 (No.43)<sup>10</sup>

田中(2022)で紹介した *Черников* (2009) の整理によると、18世紀初め、非ロシア人将官はロシア人に数的に勝っていたが、1710年代以降、基本的にはロシア人が上回る傾向を示すようになる。しかしながら質的な観点からすると、1730年代のアンナ期は陸軍元帥2名を非ロシア人が占めるなど、当時はとりわけ高級将校において非ロシア人のプレゼンスが高く感じられていたと推測される。それに対するロシア人武官の反発を象徴するのが、1741～43年のロシア・スウェーデン戦争(通称「ハット党戦争」)さなかの1742年に発生したロシア軍内での反乱事件である。

ロシア軍に勤務したバーメン貴族の父とリフリヤンヂヤ貴族女性の母を持つマンシュチェイン Манштейн, Христофор-Герман (1711～57) は1727年にプロイセン軍で勤務を開始した後、1736～44年にロシア軍で勤務し(Перевороты, 1997, C. 492)、ロシアに関する覚書を後世残した。それによると、1741年9月3日の時点で、ロシア軍9900名を指揮していたのはアイルランド出身の陸軍元帥ラッシ Ласси, Петр Иванович (1678～1751)、スコットランド出身の陸軍大將ケーイト Кейт, Яков Вилимович (1696～1758)、陸軍中將ストフェリン фон Стффельн, Федор (1747没) とバフメーチェフ Бахметев, Иван Иванович (1690～1780)、バルト＝ドイツ人の陸軍少將リーヴェン、イングランド系(当人はロシア生まれ)のフェルモール Фермор, Вилим Вилимович (1702～71)、アルブレヒト фон Албрехт, Иван (1741か42没)、イクスクーリ Икскуль (1741没) であった(Перевороты, 1997, C. 189)。バフメーチェフ以外の全員が非ロシア人であった点、ただしその出自は多様であった点が注目される。そしてイクスクーリが1741年に戦没したほかは、兵員の追加により、1742年時点で司令部の陣容も若干拡張された一方、ラッシ、ケーイト、ストフェリン、リーヴェンはそのまま留まり(Перевороты, 1997, C. 213)、やはり非ロシア人のプレゼンスを象徴していた。

マンシュチェインの覚書に示される反乱の経緯は以下のとおりである。やや長いが引用する。

9 当時のモスクワ大公国とデンマークとの外交関係の概要については、鈴木(2020)。

10 文献によっては、No.46と同様にユーリー・グリゴリーエヴィチと併記されている場合もあり、同一人物の可能性も否定できない。ただし *Португальский, Рунов* (2009, C. 364) では、No. 46について異なる生没年や経歴が記されている。

野戦軍がヴィーボルク近郊で宿営していた時、スウェーデン人たちは下士官たちとドラム奏者たちとを、書簡とともに陸軍元帥ラッソのところへ送った。当直の陸軍少将であったリーヴェンは、彼らが到着した時、前線の監視所にいた。そして陸軍元帥が都市にいたため、リーヴェンが彼らを自分のテントに通すよう命じ、彼らから書簡を入手して、個人的にそれを陸軍元帥に届けた。リーヴェンは当時近衛騎兵隊の中佐であり、この連隊の裏手に自身の兵営を有していた。それゆえ宿営で近辺に駐屯していた歩兵近衛隊員若干名が、彼がスウェーデン人たちと共に帰ってきたのを目撃した。彼らはすぐさま自分の同僚たちに対し、以下のように伝えた。すなわち、外国人たちが国家に対する陰謀を企て、敵軍から使者と書簡を受け入れた。リーヴェン将軍のテントにはスウェーデン人たちが隠されている。外国人士官たちの指揮権に耐えるべきではなく、リーヴェンを手始めに、全員を一斉に殺害すべきだ、と。短時間に300～400名のプレオブラジェーンスキー及びセミョーフスキー連隊の兵士や下士官が集まった。彼らはまっすぐにリーヴェンのテントに向かった。そこで彼を見つけられず、スウェーデン人たちが収容されていた彼の事務局に入ると、彼らと将軍の副官とを捕え、大変乱暴に扱った。将軍の護衛がこの狼藉に抵抗したが、スウェーデン人たちや副官、使用人の場合と変わらぬ扱いを受けた。士官たちは混乱を止めるため駆け集まったが、兵士たちは彼らに全く敬意を示さなかった。彼らに対する答えはただ、「野戦軍にいる外国人士官たちを全員殺す必要がある」だった。これらの分遣隊の士官の誰一人、彼らに近づこうとしなかった。殴られることへの恐怖からだったり、自分たち自身が以前から望んでいたことを彼らが遂行するのを邪魔したくなかったりであった。

そうこうするうちに、混乱に関し知らせを受けたケーイト将軍が到着した。彼は揺らぐことなく、この反乱分子たちの只中に入り、暴徒たちの一人を自身で捕えると、聖職者を呼ぶよう命じた。その者

を現場で射殺するつもりであると述べつつ、彼に告解させるためであった。その後、自分の副官たちと伝令たちに対し、他の者数名を逮捕するよう命じた。彼にはかくもお決まりの剛毅さをもって、彼がこれらの言葉を発するや否や、群衆全体が散り散りとなった。各人が自分のテントに隠れるために走り出したのである。ケーイトは諸連隊を宿営の前方に呼び出し、欠けている者たち全員を逮捕して、騒擾に参加していた者たちへの取り調べを開始するよう指示した。本案件には近衛騎兵隊員も野戦連隊も巻き込まれなかった。これらの連隊は、歩兵の近衛連隊を沈静化させることができない場合に、彼らの厚かましさを力づくで抑えるよう、武器を手にしていった。ケーイトが示した救済者的な覚悟がなければ、この蜂起は大変長く続いたかもしれない。ロシア人の士官たちは誰も、兵士たちの狂乱に対抗しようとしなかったからである。騒乱の首謀者たちは全員が逮捕された。宮廷はこの事件の検討のために委員会を任命した。その委員長となったのがルミヤンツェフ Румянцев, Александр Иванович (1677～1749) 将軍である。近衛隊の下士官であった首謀者は右腕の手首から先を切断され、シベリアへの流刑となった。他の者たちは鞭刑に処され、同様の経路で送られた。

ロシア人貴族たちによる外国人へのこの強い敵意については、ある程度は許容することが可能である。なぜならピョートル1世の諸指令により、貴族層は自分たちの古来の習慣の大部分を変えることを余儀なくされたのみならず、アンナの治世に、最重要の職務の全てが外国人たちに与えられ、彼らが自身の裁量により万事を取りしきること、彼らのはなはだ多くが、自分たちの手中にあった権力を、ロシア人たちに極めて圧迫感のある形で感じさせてもいたからである。彼らは大変横柄に振舞い、最も名門の家系の者たち相手さえ、見下す態度を示したのだ<sup>11</sup>。さらには玉座に登った際に女帝[エリザヴェータ(在位1741～61年)]により与えられた約束についても付言する必要がある。すなわち彼

11 自身も非ロシア人でありながら、マンシュチェインによる外国人士官への評価はこのように辛めであるが、その一方でNo.73の「クールラント人の将軍レンネ」がピョートル1世期のロシア陸軍における竜騎兵の編成に及ぼした功績を指摘したりもしている(Империя, 1998, С. 260)。北方戦争において竜騎兵連隊が果たした機能については、田中(2013a)。このレンネもバトクリ同様、18世紀初頭からロシア勤務を選んだバルト＝ドイツ人であった。

女は、外国人への従属からロシアを解放すると宣言したのだ。近衛連隊員たちの理解では、彼女はこの約束を十分には果たしていなかった<sup>12</sup> (Перевороты, 1997, C. 214–215)。

この反乱事件は、対応を一步誤れば戦線自体が崩壊しかねない重大事と捉えられる一方、反乱者たちの敵意が特定の 에스ニシティではなく、「外国人」全般に向けられていた点が興味深い。

偶然にも当該の反乱の契機を作ったリーヴェンは、すでにスウェーデン王国から男爵位を得ていた家系の一員で、1740年に陸軍少将に昇進していた人物であるが、その後も1748年に陸軍中將、1755年に陸軍大將へと着実に昇進しており、反乱事件による悪影響は特に感じられない。そして彼の経歴で特に注目されるのは、アンナ期の1730年末に設立された新たなエリート部隊、近衛騎兵連隊 (Лейб-гвардии Конный полк) との関係である<sup>13</sup>。リーヴェンは当初、首席少佐 (премьер-майор) を務めた後、1740～63年には連隊副隊長 (近衛中佐) の任にあった。

アンナ期に陸軍を統括する陸軍参議会の議長も務めた陸軍元帥 ミニフ (ミュンニヒ) фон Миних, Бурхард-Христофор (1683～1767) の回想によると、1740年時点の「近衛騎兵連隊は公爵 [= 摂政ビューレン] の息子ピョートル公爵 [= 後のクールラント公爵ペーター] が指揮していた。ただし彼はまだ幼年だったので、連隊指揮の実務は彼の代わりにリーヴェンが遂行していた」とされる (Перевороты, 1997, C. 305)<sup>14</sup>。1750年5月3日に女帝エリザヴェータの主催により近衛連隊士官をペテルブルクの冬宮に集めて開かれた祝宴においては、諸近衛連隊副隊長の中で、近衛騎兵連隊のリーヴェンが、プレオブラジェーンスキー近衛連隊のピョートル大公 (後のピョートル3世) に次ぐ第2位の序列を与えられており (Империя, 1998, C. 273–275)、彼が1740年代の宮廷クーデタの前後を通じ安定した地位を保っていたことが分かる。1755年9月20日付けの彼の陸軍大將への昇進も、パーヴェル大公

(後のパーヴェル1世) の生誕1周年を祝賀した、諸近衛連隊における全般的な昇進人事の一環であった (Империя, 1998, C. 301–302)。

こうしたエリート部隊での高位が、いかなる理由によっていたのか。とりわけ初期においては、アンナ期に権勢を誇ったビューレンが後ろ盾となっていた可能性も考えられなくはないが、かと言って戦場での働きが全く関係しなかったわけではないものと推測される。マンシュチェインの手記によると、1735～39年の対オスマン戦争の過程で、当時陸軍准将のリーヴェンが敵軍の大砲の射程内に自身の部隊を展開する危険な任務を命じられた様子 (1737年7月11日) (Перевороты, 1997, C. 99)、この戦闘で彼がケイトらとともに負傷した様子 (7月12日) (Перевороты, 1997, C. 102) が示されている。このように当時のロシア軍の戦闘において、将官でさえも頻繁に戦死・負傷の情報が目撃される点は、前線に立つ非ロシア人軍事ハウスホルドの苛酷な境遇を示唆する。また別の手記によると、1748年2月、オーストリア継承戦争 (1740～48年) において神聖ローマ皇帝軍・イギリス軍・オランダ軍を支援するために派遣されたロシア軍38000名の指揮官の一人にリーヴェンの名も含まれていた (Империя, 1998, C. 268)。

### ③イヴァン・ミヘリソーン (No.54)

1740年にリフリヤンヂヤで生まれたミヘリソーンは、1757年よりロシアで軍務を開始し、はや七年戦争 (1756～63年) に参加している。負傷したものの、その後も軍務を続け (Португальский, Рунов, 2009, C. 398)、特にプガチョーフ叛乱 (1773～75年) においては、1774年夏からカザンを包囲しつつ同市を攻略しかねていたプガチョーフ軍に対し、「ミヘリソーンの諸部隊が追いつき、彼を撃破した」とされる (Екатерина, 2007, C. 103)。そうした功績ゆえにか、翌75年に陸軍少将に昇進している。

ちなみに、恐らくこの直後の時期を描写したもの

12 この指摘のように、1741年11月のエリザヴェータのクーデタに参加し、その成功を決定付けた近衛連隊、特にその一般兵士においてはこれ以降、自身の政治的な影響力を自負する傾向を顕在化させたとの見解もある (Курукин (1997))。

13 ロシアにおける君主直属部隊としての近衛隊は、連隊規模としてはピョートル1世期にプレオブラジェーンスキーとセミョーノフスキーの2個歩兵連隊、アンナ期に歩兵のイズмайロフスキー連隊と近衛騎兵連隊、そしてパーヴェル1世期に近衛軽騎兵連隊が設立されただけであり、陸軍内で高い権威を誇っていた。

14 ちなみに同記事の中には、リーヴェンについて「クールラント人であり、後の陸軍元帥である」との記述もあるが、後半の指摘は誤りであろう。

として、アレクサンドル1世(在位1801～25年)の近臣として活躍し、1843年に陸軍元帥にまで上り詰めたヴォルコンスキー Волконский, Петр Михайлович 公爵(1776～1852)の回顧談(1845年記録)に以下の情報がある。「エカチェリーナ2世の治世には、知られるように全ての貴族はかなり幼年で勤務に参加した」ため、ヴォルコンスキーもまた、いったんは「自分の洗礼の日にプレオブラジェーンスキー近衛連隊の軍曹として登録され、学業の終了までの休暇証明書を受領した。」ただしその後、「当時近衛騎兵連隊を指揮していた首席少佐にして陸軍中將のイヴァン・イヴァノヴィチ・ミヘリソンは、[同連隊士官であった]私の父[ミハイル・ペトロヴィチ公爵]との自分の友誼に従い、父に対し私を近衛騎兵連隊に移籍させるよう説得し」、実際にそれが果たされることになったとされている(Рышарь, 2006, C. 246)。やはりエリート部隊での高位を介して、一定の発言力やプレゼンスが發揮されていた例と捉えられる。

そして第2次ロシア・トルコ戦争(1787～91年)と並行して生じた対スウェーデン戦争(1788～90年)において、ミヘリソンは1788年6月2日、「フィンランディアにおける諸部隊の指揮のため」現地に派遣された。この時の「彼の一時的不在に当たり、近衛騎兵連隊はババルイーキン Бабарыкин に委ねられた」との記述からは、当時の同連隊におけるミヘリソンの中核的役割がうかがえる(Екатерина, 2008, C. 55)。さらに彼の現地での華々しい活躍は、女帝エカチェリーナ2世に対し、「ミヘリソンがさらに一つの地点よりスウェーデン人たちを追い出した」(1788年7月14日付け)(Екатерина, 2008, C. 64)、「ミヘリソンがスウェーデン治下のフィン人たちのために掲示を作成し」「武器を取ることなく、おとなしく自分の家屋に留まるよう呼びかけた」(同月29日付け)(Екатерина, 2008, C. 70-71)、ミヘリソンらにより「スウェーデン人たちはダヴィドフスカヤ街道に沿っても国外に追い払われた」(同月30日付け)(Екатерина, 2008, C.

71-72)などの形で頻繁に伝えられた。それゆえにか、同年冬のフィンランドでの作戦行動の遂行を、「活力がなく、進取の気性に欠けている」総司令官ムーシン = プーシュキン Мусин-Пушкин, Валентин Платонович (1735～1804)に代わってミヘリソンに委ねる決定が下されたりもしている(Екатерина, 2008, C. 90-91)

翌1789年も彼の活躍は続き、例えば「5月31日にミヘリソンが… [中略] …スウェーデン人1000人を撃破して、大砲2門を奪取し、さらに前進した」(Екатерина, 2008, C. 160)などの戦果が伝えられた。

#### ④オットー＝ゲンリフ・イゲリストローム(イゲリシュトローム Игельштром とも)(No.25)

このようにエカチェリーナ2世期に軍事ハウスホールドとして活躍したバルト＝ドイツ人は、18世紀前半に比べ相対的に増加した印象があるが<sup>15</sup>、その一人としてイゲリストロームの名も挙げられよう。1737年にリフランドで生まれた彼は、1755年にセミヨーフスキー近衛連隊准尉として勤務を開始した。彼は七年戦争及び第1次ロシア・トルコ戦争(1768～1774年)に従軍しており(Португальский, Рунов, 2009, C. 271)、後者に関連しては、ロシアが獲得した新領土(「新ロシア」)の総督に任命されたポチョムキン Потемкин, Григорий Александрович (1739～91)がクリミア＝ハーン国の併合を試みた際(最終的に1783年に実現)、官僚メルトヴァーヴォ Мертваго, Дмитрий Борисович (1760～1824)の晩年の回想の中に、ハーンが「クリミアで指揮していた將軍イゲリストローム男爵<sup>16</sup>により一杯食わされ、礼儀正しく監視下に入れられると、あたかも釈明のためにペテルブルクに送られたが、その代わりにヴォローネシに留められた」との記述も見られる(Екатерина, 2007, C. 199-200)。

その後、1784～91年に南部のウファー及びシンピルスク県総督を務めたイゲリストロームからは、近隣に居住するキルギス人やタジク＝ハーン国の動向に

15 他に、No.96のフェルゼンも1794年のポーランド反乱に際し、現地で反乱指導者であるコシチューシユコ Kościuszko, Andrzej Tadeusz Bonawentura (1746～1817)の軍を破り、彼を捕虜にするなどの功績を示した(Екатерина, 2008, C. 294)。フランス王妃マリ＝アントワネット(1755～93)との交流で知られるハンス＝アクセル・フォン＝フェルゼン von Fersen, Hans Axel (1755～1810)と同族であり、フェルゼン家がロシア・スウェーデン双方に勢力を伸ばした構図を示唆する。フェルゼンの娘についても、1789年3月13日の時点でスウェーデンの武官マイエルフェルト Мейерфельд と結婚していたとの記述があり(Екатерина, 2008, C. 148)、バルト＝ドイツ人にとってスウェーデンとの関係が依然深かったことがうかがえる。

16 恐らくスウェーデン王国勤務時代に一族が得た爵位と考えられるが、明確には捕捉できなかった。



関する報告が、それぞれ1782年6月1日、1788年7月16日、1789年11月4日にエカチェリーナの宮廷に届いている（Екатерина, 2008, C. 16, 65–66, 177）。こうした生地とは無関係の地域へのエリートの配置が、世紀前半と同様に（田中2013b; 2015など）、世紀後半にも依然目撃される点は、18世紀ロシア帝国の人材活用の特徴として注目される<sup>17</sup>。

ところで、1789年12月にフィンランド方面軍の総司令官に任命されたイゲリストロームは対スウェーデン戦争にも参加し（Екатерина, 2008, C. 179）、1790年1月には現地に着して（Екатерина, 2008, C. 180）、対スウェーデン作戦を展開する（Екатерина, 2008, C. 185）。そして同年7月21日にスウェーデン国王グスタヴ3世（在位1771～92年）の近臣アルムフェルト Armfelt, Gustaf Mauritz (1757～1814) と接触し（Екатерина, 2008, C. 191）、両者は8月3日にヴァララ Värälä（現フィンランド）で講和条約を締結することになった（Екатерина, 2008, C. 192）。このようにイゲリストロームに軍務以外で課された役割が、バルト＝ドイツ人が以前から得意としていた外交官としての能力、とりわけロシアとスウェーデンとの中間地帯に位置し、伝統的に双方との関係を有していたことを配慮してのものか、その点を明示する史料は見当たらないが、それらが要因として働いていた可能性も一概には否定できない<sup>18</sup>。また彼の行政官や外交官としての運用は、田中（2022）で示唆したように、18世紀ロシア帝国における軍事ハウスホールドの一部（とりわけその上位層）に共通して見られる特徴であった。

なお、1791年5月16日付けの記録には、ロシア宮廷に対しスウェーデン宮廷からの要望を持参した急使が到着した際、「イゲリストローム男爵が講和の締結に際し、過剰に約束したことが明るみに出ている」との記述がある（Екатерина, 2008, C. 203）。具体的な齟齬の内容は不明ながら、イゲリストロームのこうした判断が当時のロシア外交使節に共通したものであったのか、あるいは非ロシア人としての特性だったのか（例えば成果を急いだ点に、非ロシア人としての権力基盤の弱さへの不安がなかったか）、改めて検討する必要があるように思われる<sup>19</sup>。

## 5. 結びに代えて

断片的な段階に留まりながらも以上で紹介してきた事実を基に、18世紀バルト＝ドイツ人軍事ハウスホールドの特徴について、改めて幾つかの仮説として整理してみることにしたい。

a. ロシア帝国への併合後も沿バルト地域の自治が認められ、勤務選択の自由を有していたバルト＝ドイツ人においては、次第に数的には増加するものの、ロシア軍に勤務する家系・個人は依然限定的であった<sup>20</sup>。彼らの勤務形態も、他の非ロシア人と大きく異なるころはなく、民族的な集団性をもってロシア君主との関係を構築しようとする傾向には乏しかった。

b. 北方戦争終結後も、バルト海の覇権をうかがうスウェーデン王国のプレゼンスは依然大きく、バルト＝ドイツ人の内部にもスウェーデンとロシアの双方に

17 なおその他、1786年5月8日付けのエカチェリーナ2世からイゲリストローム宛ての書簡では、以前に彼が伝えたと思われる、チェリャビンスク近郊のカミンスカヤ郷（Каминская волость）における僭称者の噂（シベリア竜騎兵連隊准尉のメーンシシコフ Меншиков が調査したとされる）に関し、エカチェリーナが疑念を呈する一方で、「そうした流言飛語については、捜査や探索なしに留めるべきではありません」と、現地の郡警察署長の職務怠慢の可能性を示唆したりもしている（Два, 1867, C. 514–515.）。

18 ちなみに、1790年9月12日の時点で、スウェーデン国王が自軍の武官の責任を問い、講和の祝賀に合わせて斬首を予定しているとの情報を聞きつけたエカチェリーナ2世は、イゲリストロームを介してスウェーデン側に撤回を呼びかける動きを示したりもしている（Екатерина, 2008, C. 194–195）。

19 ただし翌1792年12月20日の時点で、第2次ポーランド分割に向け、イゲリストロームが現地駐屯軍の指揮のために派遣された状況などからは、彼の更迭や処分の明確な形跡はうかがえない（Екатерина, 2008, C. 232）。

20 ちなみにNo.37のコールフは、1741年12月に女帝エリザヴェータの命により、ロシア帝国の帝位継承者として、エリザヴェータの甥に当たるホルシュタイン＝ゴットロップ公爵ペーター（後のピョートル3世）をロシアに連れてくるため、キールに派遣された。コールフがエリザヴェータの母方の従妹であるマリヤ（エカチェリーナとする説も）・スカヴローンスカヤ Скавронская, Мария Карловна (1757没) の夫であるなど、女帝と親族関係にあったことによる可能性も考えられる。この旅には当時駐デンマーク公使であったイオガン＝アルブレヒト・フォン＝コールフ（本稿第2章に既出）も同行した点は目を引くが（Екатерина, 2003, C. 15）、こうした両名の派遣が同族である点を考慮した動きかは定かではなく、むしろ類例に乏しい事例に属するように思われる。

目配りする傾向が根強かったが、それは一族の生き残りのための戦略だった可能性も考えられる。また、こうしたスウェーデンや他国とのつながりは、バルト＝ドイツ人が外交官としての役割などを果たす上で有効に機能した可能性もある。

c. 18世紀後半になり、ヨーロッパ国際政治上でのロシアの地位が高まるにつれ、ロシア勤務を選択するバルト＝ドイツ人の数も増加の傾向を示す。その際、表に示唆されるように、まずはロシア官界で地位を得た個人をパイプとして、その子供たちや兄弟がロシアとの関係を深める構図が存在したように思われる。

d. ロシア官界におけるバルト＝ドイツ人の急速な台頭にとって、エリート部隊である諸近衛連隊への所属が寄与した可能性が推測される。その一方で、18世紀ロシア帝国においては、貴族層からの人材養成のために1732年に陸軍貴族士官学校 (Кадетский корпус; Сухопутный шляхетный кадетский корпус)、1752年に海軍貴族士官学校 (Морской шляхетный кадетский корпус)、1758年に砲兵・工兵貴族学校 (Артиллерийская и инженерная шляхетная школа) (1762年に砲兵・工兵貴族士官学校 (Артиллерийский и инженерный шляхетный кадетский корпус) に改称)、そして1759年に貴族幼年学校 (Пажеский корпус) が相次いで設立されており、これらとの関係については今後追究する必要がある。当初ロシア人人材の不足により外来の非ロシア人に依拠していた状況から、これらの学校の卒業生へと供給源が移行した可能性が予想される一方で、表に示されるところ、バルト＝ドイツ人からも一定数の卒業生が輩出されている事実からは、彼らもこうした学校を媒介としなければ、有利な立場でロシア勤務を開始することが困難になったからなのか、あるいは彼らを含め非ロシア人の方が入学や学修が容易であったりするなど、彼らにとっての有益性が際立っていたからなのか、当該学校関係者の全体像を踏まえて検討せねばならない。

また、やはり本稿で検討しきれなかったものとしては、ロシア官界で一定の地位を得たバルト＝ドイツ人による出身地への影響力の有無の問題が挙げられる。エカチェリーナ2世期に地方行政制度が再編される過程において、沿バルト地域についても1782年にリガ・レーヴェリ両県を管轄する沿バルト総督府 (Прибалтийское Генерал-Губернаторство) が新設さ

れ、1783年にリガ県がリガ代官区、レーヴェリ県がレーヴェリ代官区に改称、さらに1796年にリガ代官区がリフリヤンヂヤ県、レーヴェリ代官区がエストリヤンヂヤ県に改称された。1795年のクールラント併合の動きとも合わせ、これらに対してはNo.9のベンケンドールフ、No.42のラームズドルフ、No.65のパーレン、No.75のリーフチェルら、現地を管轄する行政官に任命されたバルト＝ドイツ人が存在する。こうした人事があえて現地出身者を優先する志向で行われたのだとすれば、本論でも言及した18世紀前半とは異なる登用の原則が適用され始めたこと、ひいてはロシア帝国の地方政策の大きな転換を意味するものとみなし得る。また、これらの人員が中央政府と現地とをつなぐことで、双方の関係性の変化に何らかの影響を及ぼすようになった可能性も考えられなくはない。本稿の範囲を越えるが、今後、彼らの具体的活動の調査を通じて、改めて検討すべき課題と考える。

※本稿は、2022年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) : 課題番号21H00559) の成果の一部である。

## 文献

- Библиографическая (1886) заметка (о происхождении Лифляндских и Эстляндских дворян) // Русский архив. Кн. 3. С. 270–271.
- Блонский Л. В. (2007) Царские, дворянские, купеческие роды России. М.
- Черников С. В. (2009) Эволюция высшего командования российской армии и флота первой четверти XVIII века: К вопросу о роли европейского влияния при проведении петровских военных реформ // Cahiers du monde russe. Vol. 50. No. 4. С. 699–735.
- Два (1867) собственноручных письма императрицы Екатерины на имя Уфимских наместников Якобия и барона Игельштрома // Русский архив. Кн. 4. С. 512–515.
- Екатерина (2003) . Путь к власти. М.
- Екатерина (2007) II. Фасад и задворки империи. М.
- Екатерина (2008) II. Искусство управлять. М.
- Энциклопедический (1898) словарь Брокгауза и Ефрона. Т. 23. СПб.
- Федорченко В. И. (2003) Дворянские роды, прославившие Отечество: Энциклопедия дворянских родов. Красноярск-Москва.
- 古谷大輔・近藤和彦編 (2016) 『礫岩のようなヨーロッパ』 (山川出版社)。
- ゲルマン, А. А.・プレーヴェ, И. Р. (2008) . 鈴木健夫・半谷史郎 訳『ヴォルガ・ドイツ人—知られざるロシアの歴史—』

- (彩流社)。
- Иванова Н. И. (2020) Немцы на дипломатической службе в Российской империи. СПб.
- Империя (1998) после Петра. 1725–1765. М.
- カセカンプ, A. (2014)、小森宏美・重松尚訳『バルト三国の歴史——エストニア・ラトヴィア・リトアニア 石器時代から現代まで』(明石書店)。
- Курукин И. В. (1997) Дворцовый переворот 1741 года: причины, “технология”, уроки // Отечественная история. №5. С. 3–20.
- リーベン, L. (2002)、松井秀和訳『帝国の興亡——ロシア帝国とそのライバル』(下) (日本経済新聞社)。
- 松木栄三編訳 (2003) 『ピョートル前夜のロシア——亡命外交官コトシーヒンの手記』(彩流社)。
- 中村仁志 (2003) 「イヴァンゴロドの建築とロシアのバルト政策」(『関西大学東西学術研究所紀要』第36号) 71–89ページ。
- Перевороты (1997) и войны. М.
- Письма (1907) и бумаги Императора Петра Великого. Т. 5. СПб.
- Полное (1830a) собрание законов Российской империи. 1-е собрание (ПСЗ-1) . Т. 5. СПб.
- ПСЗ-1 (1830b) . Т. 6.
- ПСЗ-1 (1830c) . Т. 15.
- Португальский Р. М., Рунов В. А. (2009) Военная элита Российской империи. 1700–1917. Энциклопедический справочник. М.
- Рыцарь (2006) трона. М.
- Сборник (1873) Императорского русского исторического общества (СИРИО) . Т. 11. СПб.
- 鈴木健夫 (2021) 『ロシアドイツ人—移動を強いられた苦難の歴史—』(重紀書房)。
- 鈴木佑梨 (2020) 「北方戦争期におけるロシアとデンマークの外交関係」(『日本18世紀ロシア研究会年報』第17号) 19–26ページ。
- 田中良英 (2004) 「エカチェリーナー一世時代におけるロシア勤務貴族層の動向」(『ロシア史研究』第74号) 73–94ページ。
- 田中良英 (2013a) 「18世紀前半ロシア陸軍の特質—北方戦争期を中心に—」(『ロシア史研究』第92号) 3–23ページ。
- 田中良英 (2013b) 「18世紀前半ロシア地方行政官の動態に関する試論」(『西洋史研究』新輯42号) 57–91ページ。
- 田中良英 (2015) 「ピョートル後のロシアにおける地方行政官人事——改革期の国制を担うエリート」(池田嘉郎・草野佳矢子編『国制史は躍動する』刀水書房) 265–304ページ。
- 田中良英 (2016) 「18世紀前半のロシア地方における非ロシア人官吏」(『宮城教育大学紀要』第50巻) 69–82ページ。
- 田中良英 (2017) 「18世紀後半のロシア官界と非ロシア人エリート」(『宮城教育大学紀要』第51巻) 65–82ページ。
- 田中良英 (2022) 「ピョートル改革下におけるロシア軍事ハウスホールドの実態解明に向けての予備的考察」(『宮城教育大学紀要』第56巻) 121–137ページ。
- Thaden, E. C. (1984) , *Russia's Western Borderlands, 1710–1870*, Princeton.
- Whelan, H. W. (1999) , *Adapting to Modernity: Family, Caste and Capitalism among the Baltic German Nobility*, Köln; Weimar; Wien, Böhlau.
- 山本健三 (2016) 『帝国・<陰謀>・ナショナリズム—「国民」統合過程のロシア社会とバルト・ドイツ人—』(法政大学出版社)。
- Законодательство (1997) Петра I. М.

(令和5年1月25日受理)

# The Social Function of the Baltic Germans as the Military Households in 18th-Century Russia

TANAKA Yoshihide

## Abstract

As the territory of the Russian state has changed significantly, especially since the late 17th century, its "military households" have no uniform origin. In order to confirm the diversity of such military households in Russia, this paper analyzes the elites of the Baltic regions annexed by the Russian Empire in 1721, commonly known as Baltic Germans, and attempts to elucidate the relationship between them and the Russian Empire in the 18th century by showing their overall tendency and investigating the specific activities of individual officers. The political and social conditions of the traditionally autonomous region did not change even after it became Russian territory, and partly because it was not compulsory to work in Russia, there were still many families and individuals who maintained ties especially to the Kingdom of Sweden, their former ruler. Therefore, at least in the 18th century, the Baltic Germans who chose to serve Russia seem to have lacked ethnic group character. However, some individual Baltic German elites rapidly rose in status due in part to their affiliation with the Imperial Guard Regiments, and made a significant contribution to the development of the Russian Empire while often taking advantage of their ties with Sweden or other countries. In addition, as Russia's international presence increased over time, the number of Baltic Germans, using predecessors in the family as a foothold to enter the Russian army and government, also showed an increasing trend.

**Key words** : the 18th Century, Russia, Military Household, Nobility, Baltic Germans